

2026年1月25日 朝拝説教

「仕える群れとして」  
第一コリント 9章 19-23節

鄭ヒムチアン

- 9:19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。
- 9:20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。
- 9:21 律法を持たない人たちには——私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。
- 9:22 弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。
- 9:23 私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みとともに受ける者となるためです。

今読みましたみことばにおいて、使徒パウロは自由であるのに自ら奴隷になったと言います。この逆説的な言葉の中に、福音宣教の本質が隠されています。今朝は「仕えることを通して福音を宣べ伝える」ということをともに学びましょう。

この箇所を理解するには、8章からの流れを押さえる必要があります。当時のコリント教会は、偶像に献げられた肉を食べることの是非をめぐって混乱していました。市場に出回る肉のほとんどが偶像に献げられたものだったからです。パウロの答えは明確でした。「偶像は実際には存在しない。唯一の神だけがおられる」この真理に立つなら、偶像に献げられた肉を食べても何の問題もないと明言しました。

しかし、パウロはそこで立ち止まりませんでした。彼が目にしたのは、すべての人がその知識を持っているわけではないという現実でした。中には「この肉を食べたら偶像と関わってしまうのではないか」という迷いの中にある、弱い良心の兄弟たちがいたのです。パウロは「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。」と言いました。

ある人が偶像など存在しないという確信を持って、堂々と肉を食べています。そして、その姿を見た弱い良心の兄弟が、あの人食べているなら大丈夫だろうと考えて肉を食べたとします。しかし彼の心には迷いがあります。その時、彼は偶像に献げられた肉として食べてしまうことになるのです。パウロはこれを深刻な問題だと見ました。なぜなら、それは単に兄弟に対する罪だけでなく、キリストに対する罪だからです。

パウロは「食べ物の中で兄弟をつまずかせるようなら、私は今後、決して肉を食べません」と驚くべき宣言をしました。自分の正しさを自由を突き通すことよりも、兄弟たちをキリストにあって成長させ、建て上げることを優先したのです。

9章に入るとパウロは、さらに踏み込んで自分のことを語ります。彼には使徒として、霊的な指導者として、コリント教会から経済的な支援を受ける権利がありました。しかし、パウロは福音に対して何の妨げにもならないように、あえてその権利を捨てて自分の手で働き、彼らに仕えました。なぜでしょうか。それは兄弟たちが霊的に成長していくことがパウロの優先順位だったからです。

そして19節でパウロは非常にインパクトのある言葉でまとめています。

9:19 私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。

だれに対しても自由でありながら、すべての人の奴隷になったというのです。奴隷という言葉は衝撃的です。奴隷とは人間としての権利や自由が認められず、道具同様に持ち主の私有物として労働のために使われる人です。つまり、奴隷には自分のためにという領域はなく、ただ主人のために生きる存在です。パウロはすべての人にそのようになったというのです。さらに驚くことは、「奴隷になりました」と彼が言っているように、これをさせられたのではなく、自ら志願してなったということです。自由な奴隷、自発的奴隷となったのです。

実は、この「自発的奴隷」という概念は、旧約聖書の時代から存在していました。出エジプト記21章1-6節に記されている掟です。神様はイスラエルの民に、ヘブル人を奴隷にした場合は7年目には必ず解放しなければならないと命じられました。しかし、一つだけ例外がありました。解放の時、もし奴隷本人が主人を愛していて、奴隷として居続けることを願うなら、居続けることができるというのです。

考えてみてください。エジプトの奴隷から民を解放してくださった神です。人が奴隷として生きることを望まれないからこそ、解放の掟を定められたのです。それなのに、なぜ奴隷として残ることを許されたのでしょうか。

それは愛によるからです。奴隷が主人を愛し、自ら進んで仕えたいと心から願っている。そこには強制も義務もありません。自由をもって真心から自発的に仕える本物の奉仕、すべてを捨てて主人に仕えるという本物の献身が、その人の内に実を結んでいるのです。神様はその心と姿を良しとされました。パウロも同じでした。彼は自由をもって、喜んで、望んですべてを捨て、自分を献げたのです。

では、何がパウロをこのような生き方に駆り立てたのでしょうか。それは、ダマスコ途上でのキリストとの出会いでしょう。かつてパウロは、クリスチャンを迫害する熱心なパリサイ人でした。自分の正しさ、自分の宗教的プライドに生きていました。しかし、復活のキリストが彼に現れました。その時、パウロの人生は180

度変わりました。キリストに自由にされ、全く新しく造り換えられ、キリストに従い、キリストの姿に倣って生きる者となったのです。パウロはこのことをピリピの手紙においてこう書いています。

ピリピ 2:6-8

- 2:6 キリストは、神の御姿であられるのに、  
神としてのあり方を捨てられないとは考えず、
- 2:7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、  
人間と同じようになられました。  
人としての姿をもって現れ、
- 2:8 自らを低くして、死にまで、  
それも十字架の死にまで従われました。

愛するゆえに自発的に奴隷となる。このことをまことに体現されたのはイエス様でありました。このみことばにおいて注目したいのは「ご自分を空しくして」という言葉です。ギリシャ語でケノーシス、「空にする」という意味です。イエス様はご自身を空にされた、つまり、ここにはイエス様をご自分を捨てられた「自己放棄」があるのです。そして大事なのは、空になったとか、空にさせられたのではなく「空にする」という自発的な自己放棄であるということです。

イエス様は神であられる方でした。それなのに、その神性を捨てられないとは考えず、僕の姿、奴隷となり、人間と同じようになられました。創造者が被造物になる。これほど理解を超えたことがあるでしょうか。たとえて言うなら、陶器師が自ら粘土に、画家が自らキャンバスになるようなものです。誰がそんなことを望むでしょうか。しかし、イエス様は進んでこれをなさいました。なぜでしょうか。もう一箇所聖書を開いて見ましょう。

マルコ 10:45

「人の子も、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのです。」

イエス様は目的をはっきりと語っておられます。「多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるため」です。イエス様はご自身のいのちは「贖いの代価」と言われました。この贖いの代価は原語では「身代金」を意味する言葉です。奴隷や捕虜を解放するために支払われる代金のことです。つまり、イエス様は奴隷として囚われている人々を自由にするために、ご自分のいのちを身代金として差し出されたのです。

人は何の奴隷なのでしょう。マルコ 10 章の文脈が教えています。それは「仕えられたい」という欲望の奴隷です。自己中心の奴隷です。この章で弟子たちは、天の御国で誰が一番偉いかを議論していました。お互いに仕えられたい、認められたい、高められたいと願っていたのです。これが私たち人間の本性です。自分のことしか考えられないのです。

イエス様は、この自己中心の奴隷を解放するために、全く逆の方法を取られました。ご自分のいのちを人のために捨てるということです。神が人となり、主人が奴隷となり、いのちを与える者が死なれたのです。パウロはダマスコ途上で、このイエス様に出会ったのです。そして悟ったのです。自分がどれほど自己中心の奴隷であったか。そして、パウロは自己中心の奴隷から完全に自由にされました。そして、その自由をもってイエス様の奴隷に喜んでなったのです。彼はローマ書の冒頭で自分をこう紹介しています。

ローマ 1:1

「キリスト・イエスのしもべ、神の福音のために選び出され、使徒として召されたパウロから。」

しもべと訳されていますが、これは奴隷を意味する言葉です。パウロはイエス様によって自由にされ、その自由をもってイエス様の奴隷になったのです。イエス様を自分の主人とし、主イエス様がやるようにと示された福音を伝えることのために生きる者となりました。その告白と実践が、本日のみことばなのです。

そしてパウロは、イエス様が人となり、しもべとなられたように、彼もまた一人でも多くの人を救いに導くために、すべての人々の奴隷となりました。その具体的な実践が 20-22 節です。パウロはここで同じ構造を繰り返しています。「～には～のようになった。それは～を獲得するためだ」この言い回しを何度も繰り返しています。パウロがとった方法はイエス様と同様でした。それは「同じようになる」ということでした。なぜこの方法だったのでしょうか。パウロは「獲得するために、同じようになった」と言っています。つまり、同じようになることによって、獲得する機会が生まれるのです。逆を言えば、同じようにならなければ、獲得は難しいということでしょう。

ここには前提となる人間理解があります。それは、人は自分の殻から出てくるのが極めて難しい存在だということです。誰もが自分を中心に生きていて、そこから出てくることができないのです。だからこそ、パウロはイエス様がなされたように、自分を捨てて相手の世界に入ってしまったのです。福音のために自分の身を投じたのです。イエス様は言われました。「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます」と。人の救いは、他の誰かの自発的な犠牲によって実を結ぶのです。

私が大学生の頃、通っていた母教会でホームレスの方々への炊き出しをしていました。聖書のみことばを伝え、食事を振る舞う働きでした。その働きを続けていたのですが、何かずっと拭いきれない違和感がずっとありました。何故なら食後、何とも言えない寂しげな表情で、重い足取りで去っていく彼らの姿がありました。何か心の通った会話もまともにするのができませんでした。そんなある日、仲間の一人が「私たちも、

彼らと一緒に食べませんか」と提案をしました。一緒に食べながら、もう少し腰を据えて話をしましょうと言うのです。それから私たちは配膳の列と一緒に並ぶようになりました。あの時の初めて列に加わった瞬間のことは、今でも良く覚えています。並んだ瞬間です。猛烈な抵抗感を覚えました。道行く人々の視線がまるで針のように刺さるのです。「自分もホームレスだと思われているのではないか」という羞恥心で、私はキョロキョロと周囲を見渡し、心の中で「私はあちら側の人間なんです。支援する側なんです」と必死に叫んでいました。

ある日のことでした。いつものように落ち着いた視線で列に並んでいると、偶然そこを通りかかった中学時代の友人と目が合ってしまった。次の瞬間、私は驚くようなことをしていました。反射的にその場から走って逃げていました。「同じようになる」ということがどれほど難しいか。自分のプライドを捨て、自分の立場を捨て、本当に相手と同じ場所に立つということが、どれほどの難しいのかを知りました。

しかし、パウロはイエス様に倣って自分をすべての人の奴隷としたのです。彼はキリストを主とした者として確信をもって一人でも多く救いに導くために同じようになったのです。それだけではありません。パウロはこの生き方に倣うように、コリントの教会に、ひいては現代に生きる私たちにも語っているのです。23節をみてみましょう。パウロは誰かを救いに導くだけではない、もう一つの理由を語っています。

9:23「私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです。」

パウロはすでに福音を知っています。なのに、なぜ「福音の恵みをともに受ける者となるため」と言ったのでしょうか。それは福音の恵みを最も深く実感するのは、実は福音のために生きる時だからです。自分を捨てて誰かに仕える時、私たちは初めて「キリストは私のためにこれをしてくださったのだ」と実感します。犠牲を払う時、私たちは「キリストの犠牲がどれほど大きかったか」を悟ります。愛して報われない経験をする時、私たちは「神の愛がどれほど一方的であったか」を知るのです。

逆に言えば、自分の十字架を担うことなしには、キリストの十字架を本当に理解することはできません。自分が福音のために何かを犠牲にすることなしには、キリストが何を犠牲にされたかを実感することはできないのです。だからパウロは言います。「私は福音のためにあらゆることをしています。私も福音の恵みをともに受ける者となるためです」と。

皆さん。ここに私たちへのチャレンジがあります。皆さんに本日のみことばから心から勧めたいことがあります。

奉仕を試してみてください。教会内の奉仕だけではなく、生活全般において誰かのために仕えるということです。率先してやってみてください。今やっていることのみではなく必要を求めているところがあったら、得

意・苦手は一端置いておき、これは自分にとってこれは大きな霊的な祝福となると信じ、飛び込んでください。

そしてその場に飛び込んだならば、これは奉仕ですから自分のためではないことを心にしなければなりません。決して見返りを求めてはなりません。ただ「神と人とのために」という崇高な目的を掲げ、汗水たらし、熱心に働くのです。言いたい事が出てくるかもしれません。ですがまずは口を閉じて、黙々と奉仕の手を動かしましょう。できれば目と耳も動かしましょう。周りの必要に敏感になるのです。そして、必要に気付いたら率先して手助けしましょう。大事なことなのでもう一度言います。口を閉じて、黙々と仕えるのです。

すると、驚くことが起きます。その一生懸命閉じていた口から、文句の言葉が漏れ出てきます。「なぜ私ばかりがこんなことを」、「誰も手伝ってくれない」、「感謝の言葉一つない」。こんな言葉がふつつつと湧いてくるでしょう。さらには、協力し合っていたはずの教会の仲間に苛立つようになります。心の中で非難し、裁き始めることでしょう。「あの人は何もしていない」、「口だけ出して手は出さない」、「自分のことしか考えていない」と。ストレスが募っていくでしょう。最初は文句や不平だったのが、怒りに変わり、あるいは罵りにまで発展するかもしれません。そしてついに、こう思うのです。「もう嫌だ。自分はこんなことをするために生きているのではない」と。

それを一通り終えましょう。終えたのなら、このように自分に問いかけましょう。「あなたは神と人のためになることを目的として奉仕をはじめたのではないか」

その時、私たちは否定することのできない確かな事実と直面します。それは、自分は他者のために指一本動かすことさえ忌み嫌う人間であるということに。自己中心の塊であるということに。誰かのために生きようとすればするほど、ひたすら自分が大きくなる、その自分を正直に見つめるのです。

そして気づいたなら、主の前にひざまずき、告白してください。「私は自分のことしか愛せない、罪人です。どうかあわれんでください。」真剣に、正直に、心から告白するのです。

するとわかるのです。こんな醜い自分のために、キリストがいのちを捨てられたことの大きさ、深さ、広さ、高さを。そして同時にわからなくなります。説明できないのです。なぜこのような私のために、イエス様がいのちを捨てられたのかが。論理では説明できない、破格の愛に出会うのです。キリストが自己中心の奴隷である私を解放してくださるためにされたその十字架の意味が、言いようもない感動とともに心に迫ってきます。そしてその時、私たちの中に今までとはまったく違った思いが湧いてくるでしょう。感謝と喜びです。いいですか。その感謝と喜びをもって、再び神と人に仕えるのです。ただ、キリストの愛に応答して、感謝をもって喜んで仕えるのです。

この体験を、私たちの人生の中で繰り返しましょう。そして最終的に「主イエス様、あなただけで十分です」という混じり気のない確信が心に刻まれたとき、私たちはまったく自分から自由になります。人からの評価も、自分の成功も、世の報いも、この世のあらゆるすべてのことから自由になるのです。なぜなら、キリストだけで十分だからです。キリストで満たされているからです。

その時、私たちは真にキリストのしもべとして生きることができます。そして神様はそのような私たちを用いて、福音宣教の御業を広げてくださるでしょう。私たちがそのような、仕える群れとなることを心から願います。お祈りいたします。